木曽ヒノキの付加価値に関する研究

付知営林署　業務課　生産係　　安　田　智　宏

1　はじめに

木曽ヒノキが高級建築用材として不動の地位を築き、広く名声を博して久しい。いよいよ資源が枯渇して、名古屋営林支局管内でも木曽ヒノキの生産が僅かとなってきたが、貴重な木曽ヒノキの付加価値について追求した。

2　検討の方法および内容

付知営林署は、岐阜県恵那郡加子母村、付知町、福岡町および加茂郡東白川村に所在する国有林の管理経営を行なっており、管内には５６箇所の製材工場、木造建築業をはじめ建具、家具、木製品製造等の製造を行なっている工場等が３００箇所を超えるなど、木材を扱っている人が圧倒的に多い地域である。

地元製材工場では、国有林から生産される木曽ヒノキの製材を行なっているが、この内、木曽ヒノキを専門としている製材所は、木材生産量の減少とともに減少し現在では３工場となっている。

丸太が製品になる段階を、３工場の製材工場に出向いて調査し、木曽ヒノキが製材され各製品になる段階の製材技術を調査するとともに、木曽ヒノキの製材製品について、品目、価格の調査を行なった。

さらに、木工所における製品加工段階を調査し、木曽ヒノキを素材とした木製品等の販売価格から、木曽ヒノキがそれぞれの商品化した状態の木材使用量を計測し、付加価値を追及した。

3　木曽ヒノキの製材技術

木曽ヒノキの製材は、長年の経験の積み重ねによって磨かれた技術によって行なわれている。

木材は一本一本が形や大きさまた品質が異なり、しかも木曽ヒノキは高価な木材であるため、これの製材方法によっては製品になった段階で大きく価値の差が生じている。

今回の調査・検討に当たっては、木曽ヒノキの標準的な素材（丸太）を実際に製材を行なったほか、多くの資料の中の平均的なものを抽出して検討した。

(1) 一般的な（木取り）製材

製材方法は、大きく２通りに区分することができる。「一般的な木取り」は、図－１に示すとおり、樹芯を中心にして角材を製材する方法で、辺材といわれる外側の良質な木材部分を、材質に応じて板や役物を製材し、最後に芯付柱または土台角を製材している。

今からおよそ２０年前には、木曽ヒノキもこのような製材が行なわれていたが、現在では木曽ヒノキの内、径級が細く節の多い丸太の場合に、主に「節角」といわれる土台角や「節板」を製材するために行なわれ、それ以外はこのような方法による製材は見られない。

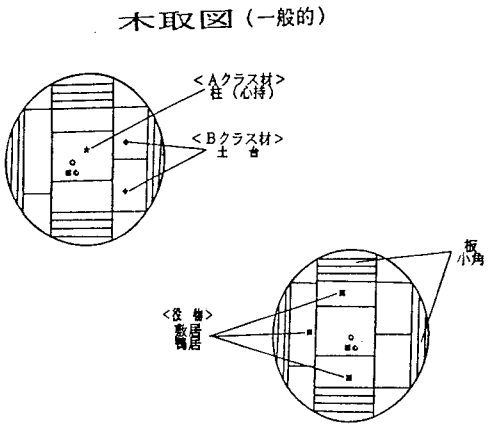
(2) 木曽ヒノキの（木取り）製材

木曽ヒノキの製材は、図－２に示す方法で、貴重となった木曽ヒノキの素材価格が高くなるに連れて、その用途はますます多様化・高度化してきており、付加価値が高くなるような用途を念頭に製材されている。

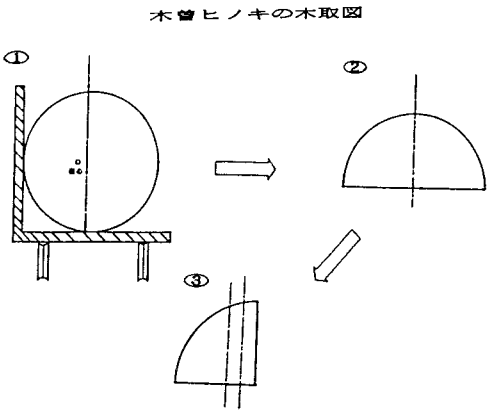
製材機の台車に乗せた丸太の４材面を十分検討したうえ、良質と見られる材面と、そうでない材面を分けて半分に挽き割り、節等の欠点の多い半分は、「節等」の欠点を見ながら板目板に挽くかあるいは柾目にして建具材を挽いたりしている。

良質の半分の製材は、板目に挽くか、柾目に挽くかを検討し、板目に挽く場合は、節を生かした「料理屋のカウンター」向けなどとし、節などの欠点がない場合には柾目に製材し、最も良質の場合には㎥当たり５００万円にもなる単板を取り、幅が１２㎝程度の場合には内装材の「鴨居」または「ナゲシ」、もっと狭い場合には「周り縁」などの高級和風建築の造作材を製材している。

図１　一般的な製材（木取り）



図－２　木曽ヒノキの製材（木取り）



4　木曽ヒノキの用途

木曽ヒノキの用途は、建築資材としては集成材に使う単板、芯去り柱、高級な内装材（造作材）、例えば、ムクの天井板、鴨居、周り縁、ナゲシ、天上竿などがあり、長さが短いものでは建具材が圧倒的に多く製材されている。また、木工材としては多種多様な利用が行なわれており、表－１に示す「製材製品」材積比率および製材製品の㎥当たり単価の通りである。

また、製材歩止まり（利用率）は、58.5％となった。

２０年ほど前には、木曽ヒノキが建築用資材として柱、根太、筋違い、ヌキのほかに荒床板、野地板などの板類としての用途があったが、現在では、木曽ヒノキが高価な木材となってきたため、建築用資材は外材や人工林ヒノキまたはスギに変わり、一般的な建築用材としては使われなくなり、木工用資材として君臨している。

表－１　木曽ヒノキの製材製品

製品名	材積比％	㎥当り単価	製品名	材積比％	㎥当り単価
建具材柾平（長材）	9.0	1,437,790	木工用材（まな板）	1.6	322,085
〃　柾平	13.8	1,114,725	（刷毛板）	2.8	287,521
〃　長材	14.3	731,292	（表札）	1.1	258,870
〃　（赤）	13.2	645,165	（小角材）	6.5	59,382
〃　（白）	12.4	429,322	（額縁）	0.5	30,612
フラッシュ	1.4	110,632	刺身盛皿（合せ）	1.8	172,869
木工用材	8.0	205,787	〃　（節板）	6.2	74,615
〃　（神棚）	7.4	498,572	合　計	100.0	609,701

5 結　果

(1) 木曽ヒノキの素材価格は、木材そのものが多種多様であることから価格を決定することが難しく、また買い手によって１本１本大きく差がでている。

(2) 希少価値が高まり、特に良材は１本単位で取引されるケースが多く、素材のまま取引が繰り返されるいわゆる「転がし」で価格が上がるという取引の実態が見られる。

(3) 木曽ヒノキの素材価格が高くなったために、用途が限定され、消費の範囲が限定されていく傾向にある。

(4) 「木曽ヒノキの付加価値は、㎥当たり１千万円になるのではないか」という期待に対し、標本木を対象とした調査の結果では、約４３７万円の価値という結果となった。

6 今後の課題

(1) 木曽ヒノキが枯渇してきており、できるだけ長く供給が続けられるような配慮が必要である。

(2) 販売については、生産地周辺において続けられてきた木曽ヒノキの製材技術および加工技術を伝承し、地域の木材産業の生き残りのために生産地周辺で販売することが重要である。

(3) 貴重な資源である木曽ヒノキを持続的に生産できるよう、天然更新施業を中心とした造林技術の確立が必要である。